

勝林寺寺報

仏教の極意

独特な味をもつた夏の野菜に「みょうが」があります。漢字では名荷と書きます。名前を背負うということですが、今では茗荷と書くようです。この茗荷を食べると、もの忘れがひどくなる、馬鹿になる、といいます。なぜそのようにいうのでしょうか。

実はこの茗荷については、こんな言い伝えがあります。『阿弥陀経』のはじめに、そのお釈迦さまの説法を聞いた代表的な弟子の名前が出ていますが、その中に「周利般陀伽」(しゅりぱんだか)という人の名前があります。正しくはチユーダパンタカといいますが、漢字をあててそのように書きまします。この人にはマハーパンダカという兄がありました。二人ともお釈迦さまの弟子になりました。兄は賢い人でしたが、弟のチユーダパンタカはとても頭が弱くて、何を聞いてもすぐ忘れてしまうほどでした。自分の名前さえも忘れて覚えることができませんでした。それでいつも、自分の名前を書いた札を背中に貼つておりました。

お釈迦様は、それほどおろかなチユーダパンダカには、むつかしい話は通じませんので、「払塵除垢」ということを教えられました。心の塵、心の垢を払えということです。そしていつも一本の筆をもつて歩くよう命じられました。彼はいつでもどこでも、筆をもつて歩きました。そして暇さえ

あれば、その筆でまわりを掃き清めました。そのことを一生続けました。彼はその筆で掃除をしながら、しだいに自分の心の塵や悟りの境地に至ることができたといいます。

『阿弥陀経』の初めに、多くの弟子の中から選ばれて彼も名前が書きとどめられたのは、そのことを物語っています。

このチユーダパンダカが亡くなつてのち、その墓のそばに芽生えたのが「みょうが」だということです。「みょうが」を食べたらもの忘れをするとは、ここからきたというわけです。昔から伝わった仏教の物語です。

この物語から教えられることは、何事についても「続ける」ということの大切さです。親鸞聖人は「ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏を称うべし」と教えられます。真宗における仏教の極意は、生命の続く限り念佛を相続することです。

(信楽峻麿遺稿法語集より)



葬儀

四月五日 豊岡 森戸 茂様 六十一歳
四月十七日 上小田 齋藤さか枝様 九十三歳

降誕会（ハラタんえ）

五月 勝林寺 予定

宗祖親鸞聖人のお誕生日を皆でお祝いたします。お参りください。とくに、法輪会の皆様には年に一度の縁会、役員の皆様には研修会を兼ねており、閉会後は、懇親会を予定しております。ぜひ、ご参加ください。

日時 五月二十三日（土）

午後二時より

内容 お勤め 法話
懇親会

会費 五〇〇円（懇親会参加者）



グランドゴルフ大会結果

四月一三日に開催したグランドゴルフ大会は、老若男女（？）三〇名が参加し、白熱したゲームが繰り広げられました。好プレー珍プレーに大いに盛り上がりました。結果を報告いたします。

優勝 永井あさ江さん（相田）

準優勝 田中重雄さん（栗尾）

第三位 大石正代さん（出合市場）

以上三名の方に加え、とび賞（五人）、ブリ賞（一人）、ホールインワン賞（九人）

の皆さんに豪華賞品を手にされました。

入学おめでとうございます

四月から小学生となられた三名の方に、入学をお祝いして、住職のメッセージと「親鸞さま」の絵本を贈りました。いっぱい勉強して、いっぱい遊んで、いっぱい仏さまにお参りして、かしこい子になつてください。（掲載が遅れましたことお詫びいたします）

二三日（土） 吉祥寺 忽明法要
勝林寺 降誕会

二四日（日） 齋藤和代宅 忽明法要
念仏奉仕団出石組

二五日（月） 忽明法要
中嶋 杏葉さん（坪口 中嶋英樹様方）
湯口 陽翔くん（横見 湯口富雄様方）
森戸 江陽くん（東里 森戸卓也様方）

（敬称略）

一日（金） 出石・但東仏教会 役員会

二日（土） 玉井輝彦宅 七回忌

三日（日） 坂本 智宅 一七回忌

中村ゆかり宅 墓参

富嶋重喜宅 遷仏法要

出石・但東仏教会 花まつり

数森一郎宅 一七回忌

山田春彦宅 一周忌

兵庫教区 実践常任委員会

森戸智也子宅 忽明法要

専福寺 永代経

富嶋義之宅 七回忌

谷垣英子宅 墓参

平野孝幸宅 一三回忌

兵庫教区 実践委員会

田村忠治宅 二五回忌

出石組 連研（長專寺）

二三日（水） 湯口 裕宅 一七回忌

二七日（日） 平野孝幸宅 一三回忌

二〇日（水） 兵庫教区 実践委員会

二三日（土） 吉祥寺 忽明法要

勝林寺 降誕会

二四日（日） 齋藤和代宅 忽明法要

念仏奉仕団出石組

二五日（月） 忽明法要

中嶋 杏葉さん（坪口 中嶋英樹様方）
湯口 陽翔くん（横見 湯口富雄様方）
森戸 江陽くん（東里 森戸卓也様方）

（敬称略）

わたしの生きてきた昭和6

きたる七月二十五日に、二十五回忌法要を「門徒の皆様と一緒に勤めさせていただき瞭子坊守。坊守というものは、寺の住職を助けて寺を守る女性の事。瞭子が、この寺に来たのは、昭和二十三年春の事。里は、島根県の瑞泉寺（真宗の学匠を輩出した寺）。

「働くが花」——これが彼女の口癖で、とにかく元気でよく働いた。戦後の貧困な時代。出石へ来るやいなや、アメリカ軍放出の中古衣料を買い込み、得意なミシンを駆使して家族の衣料を縫い上げた。当時、この寺には孫三人も預かっていた。それらの家族の着るものも新調した。彼女は結婚前、東京の有名デパートの洋裁部にいたのだとう。のちに前々坊守が「この人はいつも笑顔を絶やしたことがない。まして、いくら怒らせてやろうとしても怒つたためしがない」と言つたという。

その彼女にひそやかな口癖があつた。それは、彼女の母親から言い聞かされた言葉だつたという。



超世の悲願 聞きしより
われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかわらねど
こころは淨土に遊ぶなり

この和讃は「帖外和讃」といつて、親鸞聖人自身の作かどうか疑問視されているものであるが、すべての著作を清書し終えたのち、最晩年のものとも伝えられているのうちの、一首である。「世に超えて尊い如来さまのねがいを聞いたとはい、わたしたちはやはり迷いの凡夫。次から次に煩惱が沸き出てくる。こんなに穢れに満ちた

この身は、いつまでも変わらないけれど、如來さまの大悲の呼び声の中、このままが净土に救い取られているのでした。」

元気だった彼女が、病に倒れ亡くなる前、寺に近い病院にかわりました。看病する私に「歎異抄」の親鸞さまの言葉を何度も読ませて、念佛しておりました。

「お淨土へ早くお参りしたいという心はわずかず、ちょっとでも病氣にかかるともうこのまま死ぬのではないかとびくびくし、心細くなってしまうのは、生まれつきの煩惱の身の仕業です。苦惱に満ちたこの世はなかなか捨てる気にはなれず、まだ生まれたことのない悟りの世界なんかに心惹かれなければ、これは皆もって生まれた煩惱の仕業です。いかほど名残惜しく思つても、この世の縁つき、どうすることもできず息絶えるとき、お淨土にお参りさせていただくのです。もう早くお淨土参りがしたいと思わぬこのようなわたしを、このほんか憐れんでくださるのが阿弥陀さまです。

逆に、少しでも早くお参りしたいと思うなら、私には煩惱がないのだろうかと疑わしく思われるのです。そのようなわたしも頼もしく有り難く思うのです。このように親鸞さまはよろこびなさいました。」

この言葉の真逆「せめる 疑う 見捨てる」の心境になつたことがあります。まあここにあります。それは、他人事ではなく、つねに「自分自身」「この私」に照らし合わせて受け止めていることでした。「歎異抄」後序にある「聖人つねの仰せには、『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ』」と、述懐されていました。(中略) 親鸞聖人は、本当に大事な時、間違つてはならないことに「親鸞」と自身の名前を出しておられます。阿弥陀さまの「本願のめあてが、この私であつた、といつたとき、思わず「ありがとうございます」とお念佛申されたことでしょう。妙好人と言われる人も、すぐさまお念佛を喜ぶ身になつたというわけではありません。ご法義を聴聞するようになったのは、他人(ひと)ではなく、自分自身が問題になつたからでした。

瞭子坊守は、しかし、決して信心で法を説くなどはいたしませんでした。いつも聞く法の人でした。

(文責 前住職)

わいひとりを めあての

本願の ありがたさ

「許す 信じる 見捨てない

罪を犯してしまった人の更生を支援しておられる方のお話を聞く機会に恵まれました。興味深い内容であったので、一生懸命聞かせていただいておりました。

清九郎さんは、奈良県吉野に生まれ江戸時代の妙好人として広く知られています。花岡先生も同じ吉野の生まれで、同郷の清九郎さんを見事に描き出されたのが「妙好人清九郎」です。そのほか、先生には鳥取県輩出の妙好人因幡の源左さんについても、同様の著書があります。(中略) 浄土真宗のみ教えを聞いて聞いて聞きぬいた妙好人ならではのご法義の味わい、独特の生き方がそこにあります。それは、他人事ではなく、つねに「自分自身」「この私」に照らし合わせて受け止めていることでした。「歎異抄」後序にある「聖人つねの仰せには、『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ』」と、述懐されていました。(中略) 親鸞聖人は、本当に大事な時、間違つてはならないことに「親鸞」と自身の名前を出しておられます。阿弥陀さまの「本願のめあてが、この私であつた、といつたとき、思わず「ありがとうございます」とお念佛申されたことでしょう。妙好人と言われる人も、すぐさまお念佛を喜ぶ身になつたというわけではありません。ご法義を聴聞するようになったのは、他人(ひと)ではなく、自分自身が問題になつたからでした。

「許す 信じる 見捨てない」という姿勢でした。そうでした。講演で聞かせていただいたかなくとも、私は、常に、阿弥陀さまから「許す 信じる 見捨てない」と見守っていました。そうでした。だからこそ、前に進めていました。(文責 坊守)

藤実無極(滋賀県 報恩寺住職)